

を疑ふやうな氣までする。又飛行機に乗つて雲中に突

入したならば、丁度このやうなものだらうかと思ひ、濃氣は絶ゆず流动してゐるらしいので、自分は飛行機に乗つてゐるやうな氣がする。

「人夫さん晴れますかね」

昨夜、人夫と杓子、鎌行の話をしてゐた人が人夫に呼び掛けゐる。

「今朝の濃霧は解りませんな。鎌行きは少し危険ですよ。」

その人を始め、昨夜の賛同者は大分躊躇してゐるらしい。板倉氏でないが、濃霧のために九郎兵衛谷に墜落したら、等思つてゐるらしく、氣がのらん振り。

朝食も昨日の夕食と同じく、半養飯にアザミ汁。たゞ一度の経験で馴れたことか、大分進む。温いのが有難い。賑やかな食事。

外はまだ晴れぬ。風が妙なうなり聲を出し始めた。雲が馬より早く飛び散るのがよく見える。雲の切れ目に杓子の頭がぼんやり顯はれる。その様も實に美景だ雄大なる景色である。

嗚呼、どう／＼杓子・鎌行きは断念しなければなら

ないか。

時間はすぎる。いつまで待つても晴れそうにはない。

かれこれする内、大部の人は思ひ／＼に下山する。取残された吾々も、名残りは盡きぬが如何せん方もない。人夫の勧めによつて愈々下山しなければならない。「君子危きに近寄らず」

馬鹿な。そんなことを誰が言ふのか、言ひ所が違ふ。しかし仕方がない。再び来る時を待つべしだ。

下山一コザ辻りの快

三足登り一休み、五足進んだ一息ついた胸付きの邊は、突風に追ひ立てられ、底知れぬ奥に突激する様、暴虎馴河の勢ひで馳下り、葡萄の森、御花畠も、息つく間に通り抜ける。傾斜四十度の大雪渓に懸る。其の降りは、登りより遙に困難である。一足辻らしたならば、身はボールの如くに轉りながら落下し、あの白蛇の口の様な水煙の中に消ゆるのであらうと思ふと一層恐ろしくなる。早やストツクが雪から抜けて、足辻べらした様な氣がする。勇氣百倍、一步／＼力を入れて横ぎり進みと、足許の方が次第に明くなつてくる。こ

める。其の快。其の愉

白馬尻に付いた時には純白の服は泥まみれになつてしまつた。

一里餘を隔てた所には、風は木枯しか、寒氣は嚴冬を想しめる。然るにこゝは炎日は焼くやうに照しつける。

たゞ生温い風が、ハラ／＼と梢を動かしてゐる。白馬尻を立ちてよりは、木の根、岩角につまづき、轉々横倒木の間をくゞり、山を廻くつて北股の溪流に沼ひ、ひた走りに馳せ下りて二股に着く。

二股より一里餘の徑は三十分足らずに急ぎ、四ツ谷に歸着することを得たのである。

最後に一言

緑滴る激渦たる夏の山の姿、白雪皚々たる静かな冬の姿、いつ見てもいゝのは山の姿である。自然の大殿堂ともいふべき高い山の姿である。

昔から修驗者の徒は盛んに山に登つてゐる。白山・立山等へ籠つて禪定したり、大峰・葛城等へお山入りした。

これは主に宗教的信仰の意味からして、山に登つた

とも言はれやうが、その登らうとする根本の心はやはり體を練り、心を鍛へるのに外ならない。まことに登山は、いつの世にも身心陶冶の必須なスポーツである。

今や我が國でも宗教的信仰的の所謂「お山のぼり」の時代は正に新時代一般國民の習慣例となり、盛んに

山に登る様になつて來た、富士・白馬はもとより、そ

の險しさを以つて日本アルプスとまで名付けられてゐる信飛の兩山脈もはや幾多の人によつて踏破し盡され

て萬人に向つて解放されようとしてゐる。これは國民の元氣旺盛を表示した、まことに歡しい現象である。

近く伊吹山を据いた彦根の人よ、たゞへ伊吹山は低くとも、尊嚴な雄大な大自然は多少慕ひなつかしむることが出来るのである。況やこの山こそ關西唯一のスキーサー場としてその名は知られてゐる。然るに見よ。彼の山の名は京二中に稱へしめてゐるではないか、彦根中學の生徒諸君、伊吹山か、スキーカ、彦中かと云はれる時を作り給へ。今すぐに。スキーサー程冬の運動に適切たるものは他にあるまい。まして元氣溌濶たる中學時代のスポーツとして最もふさはしい。(岡村生記・橋詰生撮影)

第四學年奈良和歌山

大阪方面旅行記

第四學年

奥村竹藏

青山正太郎

五月廿一日(第一日) 奈良

五月廿一日晩春の候古き歴史を尋ねんと、七時四十二分我等は故郷彦根を發した。今より四年前僕等が一年の時如何に四年五年の旅行を美望した事だらう。併し今は僕等が羨望の的として、旅行の第一步に踏み入れたのだ。人生萬事塞翁が馬か?

春の名残を惜しむ雨が降つて居る。汽車は雨中をまつしぐらに進む。窓外の景色は刻々として變つて行く、近江富士は百足の住んで居た時から相不變同じ貌で此の湖國に井伊氏が威張つたのを昔にして、頭の上を飛行機が飛ばうが汽車が前を走らうが百足の再來と驚きもせず坐つて居る。雨は益々降つて来る。窓外の景色も見ゆなくなる。車内は愈々雑談に花が咲き姥が餅の草津に着いても買ひ求めるものもない。皆樂しき旅行氣

分に侵つて居る。瀬田川を渡つた。瀬田の唐橋に名殘を惜しみ、愈々大津に着いた。さあ此から江洲とはお別れだ、長い墜道を二つも通つて懷かしき京都に着いたのは丁度九時、奈良線に乗換る迄は約一時間半ある旅行の完全である様に、本願寺に參る殊勝な心掛の人もある。

やつと十時四十二分奈良線にと乗つた。伏見稻荷の赤い鳥居を車窓から、桃山にて御陵及び乃木神社を伏拜む。汽車は茶園の間をすん／＼と進み木津川を渡つて木津に着いた。次は奈良皆降りる仕度を始める。愈奈良に着いた。京都を繪だとすれば奈良は詩だ、その詩の趣を殊にしみじみとしのばせて音なき春雨がしと／＼と降つて居る。携帶品を全部旅館菊やに預けて案内人を先に立て奈良見物にと向つた。稍爪先上りの三條通を通つて、猿澤の池に出た案内人の長たらしき口上を聞く、併し柳の取巻く池その池畔を神鹿が三三五五と歩いて居る、そこへ雨が降つて居る光景、僕等は恍惚として見された。

奈良公園を鹿と戯れながら通つて、帝室博物館に入る

明治二十五年の創立で種々珍らしき物を見、それより東大寺へと導かれた。大佛は見るものにして尊ます」と川柳子は茶化して失つて居るが、實際その通りだ何等崇敬の念も起らない。但案内人の御丈五丈三尺五寸面長一丈六尺云々と云ふ説明を開て大きいなあと、驚くのみ併し此の金銅製の盧遮那佛も聖武天皇の勅願に依りて建立された昔から兵火の爲に首を落したり、堂を焼かれて雨ざらしになつたり、今迄満足に傳つて居るのは蓮座のみと云ふ事である。衆生を濟度すべき佛教にも悲哀がある。仁王門の仁王は流石一代の大家湛慶、運慶の作鬼氣人に迫る。次に美術の粹を集た正倉院に行く。宮内省の管轄となつて居る。三月堂に向ふ三月堂は奈良第一の古建築で乾漆造りの佛像が珍しい。良辨僧正の建立、二月堂は三月堂の隣りにある堂の下にあの有名な良辨杉がある。菅公の「此の度はのさも取あへず手向山紅葉の錦神のまに／＼」の手向山八幡宮に詣じた。東大寺の鎮守神である。多くの鳩に戯れる。三笠山に行く「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」安部仲麿をして、唐土にありて轉懷郷の念に堪へざらしめた山だ。奈良に於て懐しいもの、一つだ、ふつくりした山、その山の中腹

に三三本の松があつてその下の一面の若草の上に例の鹿がむれで遊んで居る、そしてそれを静かな雨でぼかして居る。全く土佐繪である。春日若宮に詣で、次に春日神社に參拜した。朱塗の社殿一千の釣燈籠老杉森々として自ら神威の嚴かるを覺へる。それより神道を燈籠の多いのにびつくりし節分の夜のこの燈籠に悉く燈明の點ぜられる美觀を思ひ三々隊をなし五五群をなして、我等の袂を曳て食を乞ふ神鹿に前餅を與へながら興福寺に行く藤原氏の氏寺昔時の規模の壯大さを二三の建築物に名残を止めて居る。雨は益々降つて來る、すぐ宿に歸り風呂に入り食を済して外出する。興福寺の五重の塔は暗黒の夜に空高く聳へて居る、それは宛も望月の欠けたる事のなかりし藤原氏の榮華の遺物としてその盛時を後世の人々に語るべきが如くに我等は此の第一日の夜に飽く迄旅行氣分を味つた。その氣分それは何時／＼までも忘れられない樂しき、我等の人生の一部分だらう。

五月廿二日(第二日)故傍吉野の部 手紙文
君僕等は豫定の如くに第二日を終りました。今吉野の宿で筆を取つて居ます。今朝六時に起床宿屋の新聞

より久米寺に行きました。女の脛の白きを見て通力を失ひ、天から落ちた久米仙人の建立と云ふ事です。艱難辛苦をして得た通力を一朝にして失つた彼が此の世をはかなんて庵を此の處にむすび餘世を此處に送つたのでしよう、時間も逼りましたので畠傍驛に急ぎました。吉野口驛で乗換へて近江鐵道と兄弟の様な汽車で吉野驛に着したのは十二時四十八分でした。吉野川の清流が流れています。六郷の渡には鐵橋がかゝって、其の上を自動車が馳驅してゐます。雨も少し止みました。僕等はシャツ一枚となつて山を登り村上義光の忠烈の碑、豊太閤の花見の跡等を過ぎ吉野神宮に參拜しました。櫻花の最早や葉櫻と變じて居るのを惜しみながら、それでも餘り多いのに「これは——と花の吉野山」以上に驚きました。辰巳旅館に着き暫く休憩の後、吉野見物に向ひました。銅の大鳥居をくぐつて仁王門を過ぎ藏王堂に行きました。藏王堂は君も知つてゐる通り大塔宮別離の宴を張られた所です。その櫻の木もありますが實際の木ではなく位置は其通りだそうです。藏王堂は修理中です非常にすばらしく大きな建物です。次に吉水神社に参りました。「花に寝てよしや吉野の吉

で極東大會の我國選手の奮闘を知り思わず謁采を叫びました、併しながら雨が降つて居ます。七時二十六分奈良の都に別れを告げ畠傍に向ひました。畠傍驛に下車しても雨は依然として降つて居ますヨーモリの携帶のない者は驛前の巡査派出所に飛び込んで傘を借り。大正の聖代の有難さをしみじみと感じました。神武帝東北陵は畠傍山東北の地數町を占めて瑞籬尊く結びめぐらし自ら襟を正さなくてはなりませんでした。神武帝に向の高千穂の峯より諸國の賊を平らげ給ひ此處に皇基を定め給いてより三千年、皇流連綿として世界に類例のなき國體の國威益々揚り世界四大強國の一として、歐州の英國に代りて亞細亞の霸權を握り太平洋の英國として雄飛すべきも、近き將來であります。此れも一つに皇祖皇宗の御加護に他ならないと思へば必々帝業の偉大なる事を覺へました。それより雨の中を天宮の趾であります。等正しく掃かれたる小砂の上を歩く時此の小砂も遠き帝即位の昔から天皇の御靈を守致しました。神宮は神武天皇の即位せられたる橿原の香具山、耳無山の古事を思ひながら橿原神宮に參拜致しました。神宮は神武天皇の即位せられたる橿原の宮の趾であります。等正しく掃かれたる小砂の上を

水の枕の下に石ばしる音】實際御製の通りで遠く下方に岩にせせらぐ眞清水の音がして居ます。その音を聞て居ると何となく淋しい氣持になります。後醍醐帝が此處を行在させられた時深夜都の事を思ひ、民の事を思われる時、木の間を通して此の水の音が聞にて来る、その時の帝の御心を思ひ起すさへ涙が流れます。勝手神社は吉水神社の近くです。此の神社は靜御前が法樂の舞を舞つた所です。吉野は古から不遇の英雄の来る所です。義經然り、後醍醐帝又然りです。辛苦して皆志を得ずして世を去られました。吉野は實際涙の歴史でつゝられて居ます。「歌書よりも軍書に悲し吉野山。」實際その通りです。それより櫻樹の間を谷を渡りて行く事七町餘で「かへらじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞごむる。」の如意輪寺に行きました。小楠公之を最後の戦ご、後村上天皇に御別れを申上げ、此處に一族郎黨の名を記して戦場に向ひました。その小楠公を思ひ起し當時を追憶するとき東郷大將の暗涙にむせられたのも故ある哉です。たゞ各寺院の寶物の大部分が素人の僕等にでも判る様な偽物を並べて長々と實々らしく話して觀覽料を徵するのに厭な

思がしました。此の堂の奥に後題醍醐帝の御陵がありま
す。桃山を見、畠傍を見た、我等にはあまりに小さく
見へました。面をそむけて涙にくるのみでした。それ
より庭園で名高い竹林院、天王櫻、猿曳坂、水分神
社等を見物致しました。夜は外出が九時まででした。
華やかな櫻と悲しき歴史の町の夜は静まり返つて居ま
す。早や高きいびきが聞えて来ました。さよなら

吉野にて

五月廿三日、六時離床。泥濘の山路を下る。前夜來の
微雨蕭々として尙止ます。舊道を辿つて六田の渡に出
づ。櫻の渡船は唯名のみ残つて今は鐵橋架かり自動車
の驛より麓に通するに至つた。午前八時二分一聲の汽
笛に我等はガタン／＼と刻々に此地を遠ざかり吉野口
に至る。和歌山線に乗換とか未だ嘗て出發以來晴天の
日なし。十時半過高野口驛に下車。驛前にて晝餐を喫
し、雨中高野登山を決行す。同行大橋君病みて奥村君
看護に留まる。遅れたる我等は急げども／＼更に追付
かず。高野口より麓までは道路平坦にして自動車・人
力車を通じ、それよりは駕籠によつて頂上に至ること
を得る。愈々山道へ差掛るに雨復激しく降り出でて行

手を阻み、マントを浸透して服は濡りて肌はジメ／＼
し、喉は渴を訴へ疲勞いやまし甚だ苦痛であつた。冷
水の湧出するものあれど今は到底之を癒し得ようとは
思はれず。加ふるに此新道は赤土多く打續く五月雨の
今日此頃は泥濘むこと甚しく、喘ぎ／＼に先行の友を
求む。曲々たる道は行けども果つとも見えなかつた
霧は漸く溪間を籠めて我等の身邊を襲ふに至り咫尺を
辨ぜず、一步を踏誤つたならば千仞の底へ消む失せる
計りだ兎角して極樂橋に着く。朱塗の美觀目を驚かす
といふに今日ばかりは何故か地獄橋かと思はれた。雨
は漸く止んだが疲勞は益々加はるのみ。尋ね飽ぐみ其
の揚句に宿坊福智院に入る既に三時半。實に我等は三
時間餘を費して漸く到着したのであつた。一同の疲勞
激しかつたので本日は休養と決す。暮に至り空稍々晴
れ、人々明日の天氣を憶ふ。何事にも捷き商人は土產
物を賣りに來て我等に切りに勧めた夜の自由散歩に出
でて奥院に至る。唯ふる常夜燈の淡き光、地に影を投
するを人籠寂として絶ゆ。匆匆に立戻る。

そのかみ女人禁制の此の山にも、時世の進運と云ふ
べきか將何と云ふべきか所々に其の影を見る。天下の

靈場として古來崇められた此の山僧、果して古の意氣
ありや、否やを疑はざるを得ず、感慨之を久しうす。
夜は更け、何處やらに梟の聲をきいた。その哀痛とも
悲痛ともつかない聲は尙今に至るも耳朶にあるを覺ゆ
ふと左右を見まはせば静かな寢息もるゝばかりである
兩手を胸に微笑む人は、華胥の國に何を求めたか。

五月廿四日、起床六時。朝食を終へて一同坊を出づ。
奥院に詣づる途すがら石塔石碑の數多あるに、案内人
の説明は中々お手のものである。貧者の一燈も遠くに
之を見た。やがて金剛峰寺に赴く。流石は本山の名に
そむかぬ其建築の美、規模の雄大に人を驚かす。柳の
間は秀次自害の間とか聞く。當寺を辭す。近々に大阪
御滞在中の秩父宮殿下御登山相成る由にて何處に至る
もその準備に忙殺せられつゝあるをみる。高野中學の
門前を過ぎるに、未來の大和尚たるべき若僧の、白衣
に袈裟を掛け勉學に餘念なきをみる、此のころより前
々日來の睡眠不足漸く發す。ふら／＼する足でぐるぐ
る引廻されて最後に靈寶館に寶物拜觀に赴く。國寶の
多くは佛教に關係ある繪畫彫刻なり。俗人、具眼の士
なき悲しさには、唯これらも亦線香臭き印象のみ刻み

込まれた。再び宿坊に引返し、先を急ぐ旅人は忙しく
下山の途に就いた。天氣大いによし。昨の上るに引換
へて今日の下る足の輕さよ。またゝく間に麓に達す顧
みれば、山頂は既に雲烟模糊の中にあり。足は歩一步
遠ざかる。さらば靈場よ。

高野口には大橋君既に癒れて待つ。高森君發病せり
と。何たる運命の惡戯ぞ。止むなく及川先生に殘留を
請ひ、我等は更に南へと急いだ。午後四時和歌山市驛
に着く。直ちに電車に乗じて新和歌浦に赴く。百聞一
見に如かず。案に相違の何の賞づべきものなきに、之
が名所かと見る人をして思はず失望せしめた。唯無心
の水は濁々として汀の水石を洗ひ、岸近く黒すんだ帆
を半ば揚げた小船行くのみ。古人は何と云ふとも我等
は之を名所とは斷すること能はず。時迫るに惶惶とし
て市驛に引返し、五時、南海電車に送られて飛び行く
先是今日の泊り大阪へ。七時過夕闇濃き難波の改札口
を出た。浪打先生出迎へられた。大阪は活動の都にして、
静止の都にあらず、との考へは我が脳裡に深く刻
まれたる最初の印象であつた。千日前を経て日本橋な
る宿に投す。外出は許可されたが、微雨複々降り出し

た。今日一日は大丈夫と喜び居たのに、何處まで我等は水に縁あるものなるか。旅さきの若人今宵も亦雨に閉ぢ込められて、無聊に苦しむ。表通りには、電車の鋭く軋る音のみ騒がしく、河上には、荷足の船頭鼻唄交りに小雨そば降る中を泰然として漕いで行く櫓の音ひとしきり響く。

五月二十五日、金曜日。遠い故郷を立ち出でてから既に四日を過ぎ、奈良の舊跡、吉野の史跡或ひは高野の靈山等あなたこなたを訪れて古い歴史の追憶に親しんだがその間、一日として太陽の快い光に浴したことなく或ひは烟雨の中を逍遙し或ひは暴雨を冒して長途に悩み我々の面には少なからぬ落膽の影が次第に濃くなつてきた。

昨夜大阪に到着して後稍小康を得たのみで五月雨は再び降り出した。

然るに本日は一天心地よく晴れ渡り碧空には赫々たる太陽の恵みが燦然とみなぎつた。一同朝餐の後極東オリンピック大會場に向つて宿を出た。朝早くからの満員電車には多くの我々を容れる餘裕がなかつたので一同は個々に電車にもぐり込み辛じて會場に着く。

大阪に於ける今回の即ち第六回極東オリンピック大會は畏くも我が秩父宮殿下の御總裁遊はされる名譽ある大會である。三國、比、支、日、の各選手は意氣彌々昂り場内には何となく緊張振りが感じられた。

一同は廣いグラウンドを圍繞した大スタンドに各々席を求めた。しかし競技は容易に始らず今度は昨日までの雨に反してそろ／＼暑熱の苦痛に弱り出した。折柄忽然として飛び來た三臺の飛行機はプロペラの音勇しく會場の上空に圓を描きつゝ互ひに妙技を振つたさまは宛ら怪鳥の空舞ふ如く、雲より雲に入り得意の旋回飛行を續けつゝ漸く天空遙かに飛去つた。午前九時過ぎ漸くグラウンドの一隅の水泳場では競技が始り、民、日の三國選手は鮮かな技に會衆を酔はし進むにつれてます／＼觀衆は熱狂し高なる拍手の響は天地を壓するの感があつた。午前十一時頃からバスケットボールを劈頭に捧高飛、圓盤投、槍投、はじめ各種のゲーム、次第に猛烈に、各秘術を盡して戦つた。午後四時半遂に終り觀衆は蜘蛛の子を散らす如く、一同は宿に歸つた。夕食後外出を許可され各々市内を見物した。十一時點検、一同就床す。

五月二十六日、土曜日。愈旅行の最後の日だ。今日は市内見物をするのだ。この日も天氣清朗まことに快い日であつた。我々は宿を立ち出で、電車によつて日本橋より本町二丁目に達し乗換して城に近い谷町三丁目に到る。先づ豊太閤の難攻不落を以て名高かつた大阪城の廢跡を見物した。第一に目を驚かしたのはかねて聞く大阪城の巨岩である。蛸石、振袖岩等就中有名なものだ。少し進めば暫くして千疊敷の跡に到る。大阪城には老樹の鬱蒼たるもののがなければ昔の名残を物哀れに語る廢樓どてもない。間もなく天主閣跡に停む。

富士登山記

三乙松宮誠一

を喫した。午後一時梅田驛に集合し、この地に止まるを残して長い修學旅行を終へて無事なつかしい故郷をさして歸途に就いた。汽笛一聲大阪に別れを告げて京都大津を通り過ぎ一瀉千里夢の中に午後五時頃彦根に到着し驛前で解散し人々伍々夫々に宅に向つた。

時うつ鐘の音しづかに遠く／＼暗の中にかすれゆき夜は次第に更けて行つた。

ながら。

段々道が険しくなるに従つて名を知らぬ花が増していく。そして噴き出した火山灰の爲めに、道は少し黒色をおびてゐる。空腹を覺える。武士は食はねど高楊子と言ふ諺を思ひ出して我慢する。而しグウ／＼腹の虫奴が呟く。それに足は疲れる、日は暮れる。時々振り返つて木立の蔭から裾野の景色を見ては又歩き出す

五月二十六日、土曜日。愈旅行の最後の日だ。今日は市内見物をするのだ。この日も天氣清朗まことに快い日であつた。我々は宿を立ち出で、電車によつて日本橋より本町二丁目に達し乗換して城に近い谷町三丁目に到る。先づ豊太閤の難攻不落を以て名高かつた大阪城の廢跡を見物した。第一に目を驚かしたのはかねて聞く大阪城の巨岩である。蛸石、振袖岩等就中有名なものだ。少し進めば暫くして千疊敷の跡に到る。大阪城には老樹の鬱蒼たるもののがなければ昔の名残を物哀れに語る廢樓どてもない。間もなく天主閣跡に停む。

往昔、關東の大軍雲霞のごとく遂にその采配の下に大廈高樓一朝に忽ち灰燼と歸したこの城跡に臨んでは坐る當時を追憶して感あること久しく、立つて城市を下瞰すれば大都活然として城下に參集し建物高く空を摩し肆廊錯雜して雜沓を極め煙柱、林の如く吐き出す煙は天にあふれ天日ためにかすかなる程である。流石は大工業市だ。然し大坂城はこの中に悄然と停み大都是且これを守つて關東に對してゐる様な淋しい力が感せられるやうだ。遂に城跡に別れを告げ造幣局、大阪毎日新聞社を見学した。十一時社前で解散し各々中食

いくら歩いても茶屋が見ない。「狐に欺されたんだらうか」と初めてKが心配相に云ふ。「なあに」と僕は打消して又歩き出す。ふら／＼する。

突然木蔭から何物か飛出した。ギクリとして皆立止つてよく見ると何んだ。强力だ。人を馬鹿にしてるKが「一合目までもう何町位か」と尋ねた。

「そうだね、お前さん。もう十町許り行きや其處がかかけすばなど云ふんでね。一合目迄はそこからもう一里半ばかり有りますよ」

仕方がない道の傍の土手に腰を投げだすやうに下して大宮から買つて來た握飯をほゝばつた。一枚貰拾錢で三つの握飯と四つの梅干とだ。その時の味と言つたら今思つても涎の垂れる。位全く餓鬼が大牢の滋味を貪る様だつた。

こゝで稍元氣を回復した。大いに勇氣を鼓して出發した。三四町程の坂を越へると、まちこがれた宿屋があつた。

「お早いお着きでござります」と番頭の挨拶を聞くともはや可どしても戻漫々出来ぬ。こゝに一泊する事に

一同が「かりしてしまつた一まわよし元氣を出して、かけすばたまで行かうじやないか」と叔父が云つたので、仕方なしに又足を引きづり始めた。やつとの思ひでかけすばたについた。ほつと一息ついた。こゝで切符を賣つてゐる。これさへ持てば各合目の茶屋で無料休憩ができる、泊り賃も安くしてくれるそうだ。有難いことだ。又登り始めた。道々出逢ふ人毎に一合目までの道程を尋ねる。二十町と聞いてやれうれしやと、元氣を出しもう十町位かと尋ねてみれば、一里と聞く。さつぱり解らぬ。がつかりする。それでも兎に角どうやらかうやら二合目までは辿りついた。

「お早いお着きでございます」と番頭の挨拶を聞くともはや何としても我慢が出来ぬ。こゝに一泊する事にした。三人は足を洗つて上る。

へでねた。

五合目の石室に入つて霧を避けてゐると、段々夜が明けて來る。何の奇もなく變もない。あの日出の期待は全く裏ざられた。何の爲めに一時頃から起きて急いで登つて來たかわからない。あの番頭の奴に一杯食はされた形だ。

夜が全く明けた。外へ出た。オウ何たる壯大なる光景ぞ。雲は宛がら白卵を列べたやうに一面に限りなく廣く敷きつめて只一つ西方に一山が雲に抜き出で、富士と對してゐる。その光景は實に四千尺立のト峰では

士で對してゐる。その光景は實に四十肩位の小僧では見る事が出來ない。全く奇絶だ。快絶だ。早速二三枚レンズに入れた。

省みて、やゝはづかし氣もした。スタンプをもらつた。途中片方は見上げる許りの高い崖、片方は雲のたちこもこめた底知れぬ谷。その間の一尺位の道を岩にすがつて、六合目についた。その危険は實に膽を冷ました。

六合目邊りはもう岩石帶であつて所々に高山植物が咲き亂れてゐる。Kも叔父も神祕に打たれてか、だまつて登つてゆく。下から名古屋生れと言ふ人が十二三人、口々に「六根清淨、六根清淨」と稱へながら老人やら、小供やら交つて來た。叔父はいつかそれを真似て「六根清淨」と元氣よく稱へながら登つてゆく。おかげで堪へられないがこらへて從いてゆく。

八合目にやつと着いて見下すとはるか下から登つて来る人が小さく見える。

省みて、やゝはづかし氣もした。スタンプをもらつた。途中片方は見上げる許りの高い崖、片方は雲のたちこもこめた底知れぬ谷。その間の一尺位の道を岩にすがつて、六合目についた。その危険は實に膽を冷ました。

六合目邊りはもう岩石帶であつて所々に高山植物が咲き亂れてゐる。Kも叔父も神祕に打たれてか、だまつて登つてゆく。下から名古屋生れと言ふ人が十二三人、口々に「六根清淨、六根清淨」と稱へながら老人やら、小供やら交つて來た。叔父はいつかそれを真似て「六根清淨」と元氣よく稱へながら登つてゆく。おかげで堪へられないがこらへて從いてゆく。

八合目にやつと着いて見下すとはるか下から登つて来る人が小さく見える。

六合目邊りはもう岩石帶であつて所々に高山植物が咲き亂れてゐる。Kも叔父も神祕に打たれてか、だまつて登つてゆく。下から名古屋生れと言ふ人が十二三人、口々に「六根清淨、六根清淨」と稱へながら老人やら、小供やら交つて來た。叔父はいつかそれを真似て「六根清淨」と元氣よく稱へながら登つてゆく。おかげで堪へられないがこらへて從いてゆく。

八合目にやつと着いて見下すとはるか下から登つて來る人が小さく見える。

Kが岩をころがして見たら、いつまでもころがつてゆく。九合目邊は非常にさむくなつたが空氣の稀薄などは感じない。所々に雪が見に出す。

Kが岩をころがして見たら、いつまでもころがつてゆく。九合目邊は非常にさむくなつたが空氣の稀薄などは感じない。所々に雪が見に出す。

て又固つたのだつた。
やつと頂上に達し得て眼下に漠々たる雲の海を見た
時のうれしさは全く言語に絶してゐた。

旅行記

三丙木村謙次

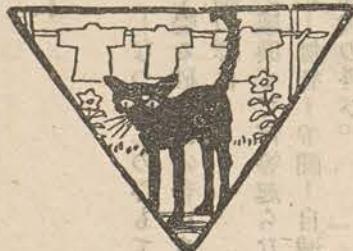
驛へ來て見ればもう五六拾名の同行が來てゐる。天氣は全く大丈夫らしい。驛前の廣場に整列して人員點呼の後、大雨にても決行で午前六時二十一分彦根を發車する。列車が行違ふ毎に、小學生、會社等の旅行團を多く見かける。車中辨當を取り、午後三時四十四分山田驛着、直ぐ電車で外宮に向つた。こんもりと繁つた常盤木の間を通り抜けて、神前に出た。其所でひざまづいて五穀豊穰國家安寧の祈りを捧げた。

其れがひびき古館に行き昔用ひた衣服戯具等を見物して倉田山停留所から電車で内宮に向つた。三三十分で宇治橋前に着いた。宇治橋前の奇麗に掃き清められた小砂利の上をザク〳〵と踏みしめながら、清き五十鈴川に架けられた宇治橋を渡つて、見事に刈り込まれた

を思ひ出して、拍手を打つた。其の響が、樹木の間を縫ふて彼方に消えた頃には、私は言ひ知れぬ莊嚴の氣に打たれて瞑目してゐた。そして敬しく我が皇祚の無

暫らく休んで二見行きの電車に乗つた。約四拾分で二見ヶ浦についた。今や夜のとばかりは全くおりて居た
とりあへず朝日館に投宿した。

綠の松越し遙に見ゆる大海原、さては夢のやうに浮んだ真帆片帆、其の美其の雄、折しも東の空濃紫色より淡紅色に淡紅色より濃紅色に遂に黃金色となり一刻時のうつるにしたがつて、黄金の光燐然として夫婦岩の間より輝き出た。此の磯香高い二見ノ浦に登る旭日の雄姿を望んだ時言ひ知れぬ壯嚴の感に打たれた二見驛から途中長いトンネルを通して鳥羽についた。



日和山頂上の四方の眺めは又格別であつた。長途の旅行を、をへて彦根驛に下りたわれ、一行はいづれも土產物の重さに苦しむ程であつた。

卷之三

常盤木の中に目覺めるばかり鮮かな紅葉の點在するあたりの景趣を見ては、さなきだに緊縮した私の心を愈々引き締めた。私は無言の儘カバンを小腕にかいこんで歩いた。鳥居をぐぐつて少し行くと御手洗のあたりに出た、高い太い檜が鬱蒼として青空を仰ぐことは出来ない。傍らに持物を置いて、五十鈴川の水で手を清めた。幾千年の太古から現在まで、そして現在から未來永劫まで盡きもせず變りもなく此の川の流れは岩に當つてチン／＼と音立てゝ流れる事だろう。此處は淵となつて静かに漲つて居る。深い底がすき通るやうに見ゆ、對岸の樹木が水に映じてサラ／＼と動いて居る私は暫らくは茫然として此の神々しさに浸つて居た。

再びカバンを持つて、幾抱へもある老檜の間を、敬虔な気持ちで歩いて行つた。杉や檜の梢の繁みから漏れ来る日の光りと、大前に額づく人のうつ拍手の反響の外には、私の心を引くものとは何ものも無い。やがて神前に参つた。全部白木造りの神殿、薄い幕を透してうかがうことの出来る階、私は。



詩藻

八二

單と複とのこんがらがりの人の住む世の總ての事は不可思議なのが本體なのか？。

五甲 中川治郎吉

晚秋に

五 中川爾路龜千

或裏町に起つた一つの事
或木枯の夜
或裏町を通つた中折帽に二重マント姿の紳士は
吸ひ残しのタバコを投げ棄てゝ過ぎ去つた。
火の點いたまゝのタバコはその後
細かな火の粉を散らして轉がつてゐた。
その夜、そのことのあつた晝後
笛をふきながら、片手に杖して
其處を通つためしひらしい按摩があつた。
そしてその人は、偶然にかそれとも心あつてか
そのタバコを踏み消して行つたのだ。

その後の夜は嚴かに更けて行つた、
何のかはりもなかつた。

暖かい一日
湖邊に來て見る——なつかしの心もて——
ザクザクと快よく鳴る砂すれの音にも
勁い沖を飛ぶ白鷗の群にも
慰めは受ける、が感興にて何等起らない
惟波の音……姑息——無智——爭鬪——自滅……
それは人間への挑戦の叫び。

暖かい一日
雜木林を歩いて見る——満たされぬ心もて
ものぐるほしい程の淋しさと
空虚な心を襲ふ落葉の騒音に
一方ならず驚ろかされるのだ
カサカサの音……凋落——因循——失望——寂滅……
それは人間への呪咀の聲。

あゝ、大氣も澄むてふ玲瓏の秋も

野分が木枯の風と變り果てる頃となれば
たゞもう寂寥の一語で盡さるのみ

夏の落日

乙五寺村抱星

われ今宵迎火の日を
森ちかく墓邊に立ちて

暗になくなかな聞けば
吾心ひたにごよみぬ。

風もなく水も流れず
ものなべて涸れ果てたれど
高原の稻は實りて
草間ぞこほろぎ聞ゆ

日は落ちぬ赤き落日
山すべて深きしじまに
夕映の光淋しく

野路急ぐ人を追ふなる

たゆたひの赤き光に
小童のひとみはうるみ
故しらず涙ながる
懷しき若き思ひ出

夏夜散策

夏の夜はあはきかなしみ
千草なく早馬追の
聲わけて露にねれつ
聲高く口笛歌ふ

灯も見ねず里邊の方に
くろき森あやしく浮び
夜は更けて人の聲なし
月出ですこほろぎむせぶ

ああ田水せせらぎ止ま

暗光る螢の幼螢等を
のぞき見て獲んとはすれど
へぞつ草むら吾え進まず

ああほそし口笛吹けば
山邊へて山邊にこたふ

静まれる闇の御空に
星またたきてわすかに白し。

秋の斷章

赤き洋館の傍

ボブラーの葉々の老いしささやき
日輪の光はどこまでも赤い淋しみ

ああ、心ゆくこの雰圍氣

秋は收穫の時、すべてが爛熟の時

ここ廢墟の寺院に秋の影はミツチリと漲り渡り
重々しい——かるい秋風が覗き見る

書なれど秋草のかけにこほろぎは鳴く

訪れ來たる春

佐保姫の訪れても來たれば
み空にはそこひ知れぬ
暖かさはびこり

近き牧場の牛もなくなり

いつとは知らず
深山の雪色あせ了りて
その面ビロードの氣配あり
心に沁みて、その感觸!! 色
おおそは過ぎ去りし夢の事か
暗き影部落をとざし
かそけくも降りつむ雪の

音吾耳に入りて

人の心日々にすさびぬ

さはれ今

吾心よろこび満ちて

吾心うれしさに打ちふるふ

春!! われ

ふたたびみつめてほほゑみぬ

淡き悲しみ

春!! 雨!! われ

ふたたびみつめてほほゑみぬ

夕ざれば、われ
高き下駄はきて油買ひに出て行く

野をわたる秋の野分に
赤蜻蛉は散りてはとびかふ。
ああ輝かしい秋色
野は一面の秋光!!

おお明るき油屋の店に立てば
灯のつける空車一つ
ひき手も見えず
覺ゆるは淡き悲しみ

或の船長のうたへる

ああ夜だ、すべての醜惡をつつむ夜だ

暗き波間の夜光蟲の

さびしき光りは波にゆれつつ

遠き船路を繰り返しつつ

老いたる淋しの船長の吾

今狂ほしく舷に出でてはろばろと思ひを馳する

死に連れいく惱ましきスクリューの音の

深き沈黙に船は歩みを進め

死に連れいく惱ましきスクリューの音の

うるさく耳にまつはる

頼りない海上の牛生

絶えざる暴風雨の度に吾心無惨に蝕まれて

少年の頃の暖き心の影を追へど——みとめず
あの陸に辿りついて永久の絶對の安靜を得るのは何時
の事か——
檣は朽ち甲板の色は剥げはてて船底には黒々と藻がか
らみつき
幽靈船ではなからうか

船室には今あかあかと灯はどもり
荒れくれ水夫は今し淋しさまざらしに

無暗に呻る濃い火酒

その赤銅色の頬

激しい船路にすさま切つたあの險しい眼の光

たまらなく忌まはしいサムシングの暗示

懐かしの陸に何時かは着かん

されどされど朽てるとはいへ波にたへぬとは云へ

長の年の家なりし

この船にはださるる吾心の痛手

憂愁に曇つた頬を上ぐれば

青く星はまたたきてビツタリと視線が合ふ

人生は短い

直ぐに死んでゐくのだ

空に消ゆる流星の光の様に

ああ永遠につづくはこの海と空

行きつく所はあの涙ぐむ青き星

永遠の安靜だ絶對的の陸地だ

併し海はいつまでも波打ち噪ぐものを

秋蛩のつぶやき

ああそれは吾等にとつては

残酷な報告——
時雨は死を囁いた
仲間の奴等は
餓の餘り互にただかつた
そして共に死んぢまつた
吾等はそれを笑つた。
嘲笑した
「無智な奴等よ！」

詩 蘭

何故となく涙誘はるゝ
静かな宵

春雨がしどくと闇の中に泣いて居る
死に去りし友の忍び泣きにも似て

晩れ咲きの水仙

南蠻瓶に
投げ込みし
晩れ咲きの水仙が
淋しく本箱の上に沈黙のつゞき

次第々々に春雨の宵は更けて行く
死の静寂が闇と共に來た

友の別れの記念の萬年筆に
友が黒い輝きし瞳思ひ出されて

今宵またしのばる歸らぬ日

あはれ春の宵

永久に語るよ別離と追憶の色

聞ゆるか聞ぬか
夢の境にむせび泣く春雨
いづかたよりわが心をうつ
或夜の友の忍び泣きにも似て
心をもゑぐらるゝおもひ
悲しく流るゝ涙に
ベンの金環も水仙も
春雨に包まれしごど
うるみゆけり

心なき時計のセコンドの響は

室に響けり
一刻み毎に

吾にも来るべしいつの日か
「死」

不思議なる死
不思議なる死の來らんとは

雪の大伊吹の夕映を歌ふ

静かな沈黙の花よ
白きはみ手にも似たり
このベン差出せし最後の幻影よ
黄きはこの金の輪にも似て

來たのは
忍び足して身に迫つて來たのは
薄墨色の薄絹の淋しさばかり

静かな沈黙の花よ

白きはみ手にも似たり

このベン差出せし最後の幻影よ

黄きはこの金の輪にも似て

大伊吹の崇高なる白き自然
重り重る白き峯々
遙かに遠く笠置の連山
白く霞む

靈は燃ゆ魂は消ゆる
壯嚴なる夕映である

赤血は淀む大湖琵琶
紅蓮の氷河は流るゝ高原
峰より峰へ走る紅雲
ドウ／＼と不斷の調渙流は
深谷の底に怒號す

くだけ落ち行く
最後の光の前に

愛も憎みも
嘆きも喜びも
文字通りに無い

萬丈の

雪煙蹴立て、

一瀉千里

あゝ勇壯

スキは滑る

麓の森へ

新作琵琶歌

五丙野瀬窓雪

古城の口すさみ、

「凡そ世の。老いも若きも心して。見る古への賢人や
偉人と稱はるゝ其人も。(切)功績を爰に尋ねれば。」

(大千)數へつきせぬ世の浪に。もまれもまれて幾度か
からき憂きめをしのぎつゝ。業なり名ざげ諸人に。
(中切)うやまはるゝぞ尊しや】

つのぶ

五丙野瀬光三

牧の老草根は枯れて行手をくらぐ、
群立てる樅の梢は、わくら葉を、
夜風にさらす、霜さむき日高大野の、
静寂にひとり、うごめくや、袖せばき、
あつし衣さへ、しとぬれて、
荒縄まとふ腰刀のみ、きらゝ閃く、

朝の光り

臥牛の息の凍る毎、
舞ひたてば、たゞひた沈む。

立ち並んでゐる町の家々

そこには
あてどもない空想を描いて
朝から夕べへと
濁つた水に似た生活が
間断なく繼續されてゐる。

急ぐか、破れし草の戸へ、泥壁剥げて、
傾くを修理ふ間なく、やがて吹く、
そじろ節、鹿角ぶえの、銳き音色、
峯をも越ゆよ、野も越えて、千里遠國、
然ある、内地人に囚れしその妹へ、
灰暗き燈、魚油かけれる下に、
待ちわびてひもじと泣くか、はじゝめど、
乳なき身故、音はひくう、
搖られ心地に、かすかにも落葉は空を、

名にし近江に名も高き。我等が日毎通ふなる。縣立彦
根中學の。古き歴史を四つの緒に。しらべかなでゝ滌
ひなば。色も香もある老梅の。氣骨に富みし幾星霜。
龍駕を此處に二度までも。駐め玉ひし譽ある。學びの
窓に朝夕を。過ごす六百の健兒們。(中切)いかでかふ
るひ起たざらん。」

(大千)慣れし故郷を後にして。親しき友と手を別ち。
頼みし親の膝を去り。矢竹心の一すちに。「立てゝは
堅き志。岩をも通す桑の弓。螢の光り窓の雪。(吟變)
股に錐さし壁うがち。千辛萬苦なめつゝに。つとめは
げみて行末は。鳥の群なる鶴となり。功績を世々に揚
雲雀。廣き心を狭き野に。旭と共に輝かし。たゆまぬ
思ひ吳竹の。節新しき鶯の。聲したはるゝ望みして。
切嗟琢磨の勇を鼓し。世にも人にも尊まれ。紅匂ふ我
校の。旗風サツト磨かさば。(中切)實に心地よき事な
らひ』

奮へ六百の若殿原。起てよ六百の健男兒。鐵石心を磨
けかし。磨けかし』

夜の夢からさめて
老人も子供も
男も女も

新體詩

三甲名烟榮一

甘ツたるい蜜柑を含んでゐる様な夢心地で
この新鮮な朝の光りにふれ様としてゐる。

梶

室内にしみこむ陽の光りは
更に急激な警告を與へようと
まばゆい光となつて流れ行く。

人々よ。

なつかしい夜を思ひあこすな
そこには紫色に爛れたる亨樂の氣分が
人々の心にふれ様とのぞきこんでたではないか。

人々よ。

御身等は新らしい朝の氣分の前に立つて
若い、何處までも延び行く心を
一心に生長させることを祈れ。

人々よ。

御身等は新らしい朝の氣分の前に立つて
若い、何處までも延び行く心を
一心に生長させることを祈れ。

夕べとなれば、
裏の森に来てなく梶。

お前の聲はなぜそんなに陰氣なのだ。
ホーホーと寂しさうなその聲、

お前の聲はなぜそんなに陰氣なのだ。
ホーホーと寂しさうなその聲、

お前もまた梅も咲かう櫻もさかう、
アレまた今晚も鳴き出した。

ホーホーホーホー……

なんてまあさみしさうな聲だらう。
聞く者の魂の底まで觸れる様な、

強いさみしさだ。

お前の眼玉はどうしてそんなにも、
陰險なのだ。

黄昏時になるのを待ちかねて、洞の家から、
裏の森に飛んで来る。

そして陰氣な聲で、

今はホーホー、今はホーホー。

もう好い加減にあつちへ行つてくれ、

梶さん、お前は魔の鳥だ。

暮の秋

三甲 尾本信藏

春の小川

黄金と違ふ菜の花や
たんぽゝあまた咲き亂れ
エデンの園と違ふなき
美しき野邊をうね／＼と
ぬいて流るゝ笹の川
水鳥浮きぬみ空ゆく
雲もうつりて麗しく
岸の小草におく露の
さゝやく水の音聞けば
血氣盛ん青年の
もゆる思を歌ふごと
これぞ希望の響なり。

古城山の頂に

弓張月の上る時

清く聞ゆる笛の音に

庭の紅葉のハラ／＼と
散るを見ること淋しけれ。

雪の野邊

三甲 北川

壽

裸木
寒げに立てる
をちこち。

家、木
雪に埋もれて
低く小さく……。

野の果

傾ける北の
暗い空の極みへ

墜ちこめり……
さくらんぼ

幸福なる村人の
鼻歌の聲、そこら
人々皆清き小川へ
あゝ幸福の世界は開く——

西日落ちて

腐れたるミルクの色
黄昏の靄は深く

冬枯の野の方に
癪を病む太陽の爛れし光。

村里の暁

人も馬も木も
眠る

有明の月
櫻花のごとく——

清き空氣に漂ふ村落
皆目ざめて

狂犬

あゝまたひどしきり
繫きたる鎖のひゞき
狂犬の振り結る鳴聲
動かざる靄に滲みいる。

狂犬

人

和歌

『百舌の聲』

五甲川端菊夫

○秋の雨

今宵はも小雨ふるらし外の面には落葉にかかる音きこ
ゆなり
溢柿の葉かげに赤き實の一つ秋の小雨にぬれてありけ
り
秋更けし今宵秋雨しのび來て落葉打つらし音きこゆる
も

○時計の音

真夜中にふとめざめたり小時計の音なつかしみ我はき
きけり
ふとさめて枕邊にきく小時計の音なつかしき秋の夜か
な

○さ 霧

立ちこむるさ霧の中を行けばほのかに聞ゆ機械場の
音

たちこむるさ霧破りてひた走る汽車の赤き灯かそかに
見ゆるも
赤はゆる東の空に雲走りさ霧はれ行く晚秋の朝
○すすき
水枯れし白き河原の上にしてすすきさびしく風にそよ
げり

○秋の田
秋の田に稻刈る乙女一人居てひた走る汽車眺めてあり
ぬ
刈り終へて畦にいこへり田舎女は赤き入陽をまどもに
受けつ

○夕もや

時つぐる汽笛しづかに流れ來ぬ夕もや白く村つつむ時
○ふるさと
潮を吹く鯨すむてふふるさとの海を思ひて今日もくら
しつ

○なき友

赤もゆる柿をみつめて我ひとり今は世になき友を思へ
り

○灯

泣きぬれし瞳にも似て町の灯は空の彼方に輝きてあり
灯ともして闇路を走る汽車見てはひとりさびしく故里
を戀ふ
波止めにひとりさびしく町の灯をかぞふてふ君我はし
のばゆ

短歌

心の反映

五乙寺村抱星

雨降るらし春の夕を雲垂れて
山田の蛙ひたなきになく
川上の筏守る灯がこの夜更
チラチラ動き蛙鳴くなり
雨後の風吹き荒ぶなる野の涯に
四月の高山の雪のほの見ゆ
雨の日は寒く暮れけり遠方に
汽笛を聞けば心ぼそかり
何鳥か木々に尾を打つ氣配して
音もかそかに秋の日は暮る

何鳥か残れる桐の枯れし實を
つつく音する初春の朝
眞夏陽をわれ裏山の草にねて
淋しき蟬の殻を見付けぬ
眞夏陽もかげりて涼しこの谷の
岩間を清水湧き出て止まず
乾く草の香忘れかねつも
秋の雨今日もひねもす色あせし
彼岸花にぞ淋しくそぞぐ
秋陽射す真晝を屋根に上り来て
柿もぎ食へば心たらひぬ
漫珠沙華あせたる花の一つ見にて
秋ふかき野は風吹き荒ぶ
朝毎に積み来る舟のすぐり菜の
大きくなりて秋ふかみ行く
つよやかに西風吹けばこの朝を
教室さむく硝子戸鳴るも山林の聲
此夜更け泣けよとばかりこほろぎの
淋しく鳴きて時雨するなり

折にふれてのさゝやき

五年渡邊泰興

田舎道音たてて行くが夕馬車の
幌をめくりて秋風の吹く
心地よくプロペラーの音響き來て
山峠の道を赤蜻蛉飛ぶ
山峠の道をし獨立越え来れば
道の草むらこほろぎの鳴く
山峠の道を曲がればつやかに
山田の柿の黃葉せる見ゆ
濠ばたの櫻の葉々は散りたれど
強き力に冬芽をもてり
牧場のボブラの葉並白く
惱みてありぬ嵐なぐ朝
今日も亦時雨に暮れぬしかはあれど
淋しさに窓あけねば闇ふかく
晚秋のこほろぎ聲細りけり
この夕を砲車は過ぎぬかるみのみ
時雨の道を行ける兵士よ

幸祈りつゝ奥山に生ぐ
清くすむ朝の空氣の心地よや
暮るゝ野邊もだして行けば大鶴
冬最中雪はらゝかに散りくれば
北風さむくわがそびら吹く

胸をうづむ尾花が末に蝶一つ

風のまに／＼ゆられてゐるも

ひぐらしの聲もかなしきま夕ぐれ

あは／＼こよす思ひ出の浪

大君の御代は榮えん百代草

もゝよ巖にこけのむすまで

小夜深く荒磯のやざりいねられず

岸打つ浪の夜を高鳴れる

白波の濱松が枝に風あらく

荒磯の里になく鳥かも

秋の暮音もかそけく秋の葉は

時雨の中をあさにけに散る

嵐の夜あやめもわかず四辻に

辻の孤燈のぼつねんと照る

築はある日夢見ながらに丘に立ち

八尺入りつ日見いりけるかも

涼風のふきわたりくる秋の野の

青深草に虫すだくきく

秋風のふけるまに／＼流れくる

笛のひゞきの聞きのさやけき

久々に親子つどひて浴あみして

夕餉に寄りてむつがたりしな

神無月亡びのうたもほそ／＼と

虫なく庭は露けかりけり

ふる星はなべて清かれよしゑしや

われは求めんあか星のかげ

ひぐらしの聲のなつかししかあれど

餘りに鳴けばいきごほろしも

涙もてさいはての文かきし友

しのぶ夜悲し山時鳥なく

最期てふ言の葉は悲し友去りて

落つる涙のせきあへぬかも

雨晴れの庭の木立に陽はさして

露一つぱいに落ちもこぼれず

たははにもなれる柿の木秋くれて

骨のみのこる見る日悲しも

ひた寂し夕浪さわざさむ／＼と

夕海岸に漁夫一人見ゆ

なんとなく悲しき夕秋の暮

赤きと山におくつきの見ゆ

夕暮の餘光のもとを蟲一つ

飛びてゆけり行方知らずも

百船のたゆたふ港の町くれて

ちらゝ洩れくる船のともしび

風の共誰がすさびかよ琴の音の

浪にもつれぬ秋のゆふ濱

小夜深く路樹によりて綿津見の

浪の遠音をなつかしみ聞く

我が外に人影もなし丘の上は

今暮るゝなり秋近うして

深き森もだして行けば入相の

鐘のひゞきて反響悲しも

白き砂青き松の間ゆちら／＼と

見ゆる白帆のいともどけき

友と別れい行き寂しむ夕まぐれ

夕なぎ磯に濱千鳥なく

道歩き我がはく息のほの白く

よものしづまに吸はれてゆくも

或る一日歩みしあゝと紅インク

ぬぐふ方なく涙もてみる

友送り歸る驛路只一人

時雨の中をしほ／＼とゆく

感傷の白星

五乙 筒井 清彦

○庭芝の刈られた上に椿落ち

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○春の淋陽の淋しげに映ゆ

とぎれ／＼に草の根のかげ

○夕闇に泣く音あはれや鴉

暮れ行く空に夜鶴なきゆく

○夕闇に春の夕の思ひ出は悲し

○片割れのおぼろ月をばながめつゝ

○蟬の聲跡形もなく消ゆる如

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○波止めに遠き町の灯唯一人

とぎれ／＼に草の根のかげ

○夕の方月草の咲く濱に出で

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○一人淋しく月の出を待つ

とぎれ／＼に草の根のかげ

○波止めに遠き町の灯唯一人

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○黄昏るる野路を急ぐ僧のあり

とぎれ／＼に草の根のかげ

○鐘の音遠し桐の葉おちぬ

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○白き月桑島をば照らすかな

とぎれ／＼に草の根のかげ

○虫の音寒し晚秋の宵

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○澄みきりし大空高し天主閣

とぎれ／＼に草の根のかげ

○忍びつゝかそけき光放つなる

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○白き光に秋は更け行く

とぎれ／＼に草の根のかげ

○わわれは唯はてなき海の空高く

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○淋しく光る白き星なり
○ただ一つ白き光を放つゝ、
○黄昏る湖に映ゆる星あり

○白き月桑島をば照らすかな

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○虫の音寒し晚秋の宵

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○澄みきりし大空高し天主閣

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○忍びつゝかそけき光放つなる

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○白き光に秋は更け行く

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○わわれは唯はてなき海の空高く

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

○淋しく光る白き星なり

さまよひ出てぬ長き川沿ひ

井伊直弼朝臣誕辰祭に参列して

五丙（窓雪）野瀬光三

第二の井伊大老たらんことを、面に強く表はせる、彦中健兒を代表し、吾等三十名の者は、霜月十日、公會堂の前に集りて、葉末仄かに枯れんとする芝生に横はりぬ。しばし空高く金龜城山を仰ぎて。

散りぬれど名はどこしへに傳はらん

金龜の城の礎かたく

落葉のつごひ

五丙野瀬光三

白布かけて鏡にあれば吾が顔の
ほどほど瘦せてゐるが寂しき
白布かけて前の鏡に吾ありぬ
安らけくまた眼をつぶりたり
石鹼を頬にねればひんくと
快よきかも眼をつぶりゐる

出て見れば思は頬に手をあてぬ
悲しき秋の風の吹きして

ひやゝかに吹き來りけり秋風は
かへり途いそぐ吾が帽を通し

母病む

母病むと街を急ぎり行く人と
われと少しのかゝはりもなし
安らげく今か寝たまふ母の顔
しみんと見ればかすかなる息

雜吟

三甲名畑榮一

何となくさびしき心胸に秘め
石をけりつゝ語る友かな
やりばなき淋しさ抱き今日もまた
黄昏の川に石投げてみる
新しき駒下駄嬉し外に出て
道の小石を蹴りてみしかな

塵もなき机に向ひベン取りぬ

ひかりのみてる初秋の空

試験の日うまく出来たる嬉しさに

思はず机たゝき見しかな

弟の机買ひたる嬉しさに

本なごせて眺めるかも

春のごか晴れし日曜の柱をば

小さき虫の上り行くかな

電柱を立て終るごとに工夫等は

煙草ふかせり午後の川端

箱の外に出だしてやれば嬉しみて

この仔兎はびよんく飛びぬ

弟の書く軍艦はいづ見ても

我が訪ひし友は居らざり何となく

心ゆるみて空を見上ぐる

手疲れて筆やめし時窓越しに

鶯聞けり午後の教場

雪の山

三甲尾本信藏

松あをき山はこなたにつらなりて

をちの高嶺ぞゆきましろなる

伊吹嶺はけさ雪白しちどりなく

小川の堤かせさむくして

琵琶の湖なみぢの末の雲晴れて

比良のたかねの雪ふれる見ゆ

松原

よろづよの聲を傳へてうらしくの

松より松にかせふきわたる

いそやまの木々もさやかに表れて

波こそもゆれのぼる朝日に

磯近き丘より見れば目もはるに

ありその松のおも變りせぬ

月

若竹の茂れる庭に照る月は

葉毎くにうす影うつす

弓張の月影清き窓によれば
ほろりこぼるゝ萩の葉のつゆ
夕月夜遠方にふく笛の音に
何故となくわが胸悲し

淋しさの餘り

三甲 藤野 豊

淋しさの餘りに心たえかねつ
外に出れば月見草咲く
思ひ出を辿るにつらき身にしあれば
取留もなき夢を追ふなり
お祭りの騒ぎの中に紛れ込み
紛れ出で來し我れにぞありける
或の朝の悲哀しき夢のさめ際に
耳に入り來し雨の降る音

思はすとおきたきものを今日もまた
何時か想ひに耽ける悲哀しき
蟬のなく聲のしみ／＼身にしみて
獨り淋しくもの想ふ吾れ
たのしかりし幼き折りの踊りをば
見し我が心過去を走れる
なつかしき想ひに耽けるうれしさに
何時か東の白み來る朝
あればこそ苦しみの種となりはする
忘れ欲しくも吾れは忘れじ

遠カになく虫の聲ほそ／＼と

わわれが淋しき心にも似て

過ぎし日の思ひ出に又胸に來し

そぞろ歩きの公孫樹の影

消えて行く紫の煙

なつかしきお城の草にねころびて

空にすはれし十七の心

なつかしき文の數々読み行けば

何時とはなしに萩の花散る

くだらない歌など書きてよろこべる
男ぞあはれ秋の風吹く

夏の夜の涼しき風にひら／＼と

河岸を彷徨ふ京の花かな

懷しの西

三甲 北川

冬近き野ははろばろと草枯れて

夕日かざろひ、とんば飛びをり

ひととの楓のありて我が家に

秋深々と訪れて來ぬ

無花果の根本に獨りつながれし

小牛鳴くなり晝の小雨に

恋しくば尋ね來て見よ鴨川に

君が心の花は咲くなり

紫の煙ゆら／＼登り行く

吾がスタデーのさびしき静もり

淋しくもコバルト空のに消えて行く